

日本美術史講義 7 b

2021年秋学期 火曜 4 限

担当：伊藤 大輔

第1回

【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元等の権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

【1】 法隆寺と飛鳥時代の彫刻

①法隆寺の創建

1. 聖徳太子の治世

推古元年（593） 推古天皇の摂政

推古二年（594） 三宝興隆の詔

推古十二年（604） 十七条憲法

推古十四年（606） 勝鬘經講讚

法隆寺は、太子の仏教政治の展開の中で
創建されたと考えられるが、

正確な時期は不明。

図版削除

①法隆寺の創建

2. 法隆寺の文献初出

『日本書紀』推古十四年（606）

聖徳太子の勝鬘経・法華経講讃に対し、天皇が斑鳩寺に水田を施入したという記事がある。

→但し、この出来事は文献によって年代に差があり、信憑性に問題がある。

①法隆寺の創建

3. 他の手がかり

「薬師如来像」光背銘（法隆寺金堂）

推古十五年（607）用明天皇の病氣平癒を祈って薬師像が発願されたが、天皇は完成前に没した。

そのため、推古天皇と聖徳太子が引き継いで完成させた。

→この像は、622年の「釈迦三尊像」より様式的に新しく、銘文の信憑性にやはり問題がある。



日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012

①法隆寺の創建

4. 現在のところ、法隆寺の正確な創建年代は不明。

推古天皇十三年（605）～十五年（607）頃に創建されたと考えるのが穏当とされている。

②法隆寺の再建・非再建論争

1) 明治時代以前～法隆寺は聖徳太子創建時の姿を保っていると
考えられていた。

2) 明治の実証史学～再建論の発生

黒川真頼（くろかわまより）・小杉楡邨（こすぎすぎむら）らによる。

『日本書紀』天智九年（670）四月三十日の記述が根拠
夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も余ること無し。
（あかつき）（ひつけり）

②法隆寺の再建・非再建論争

3) 建築史・美術史からの反論 = 非再建論

1. 法隆寺の建築様式は、670年を含む白鳳時代以降に建てられた薬師寺の金堂や五重塔とは全く異なる。

薬師寺が、唐の様式に依拠するのに対し、法隆寺はより古い時代に、朝鮮半島経由で伝えられた中国・六朝時代の様式を反映している。



日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012

法隆寺の建物は、母屋や塔身に対して、屋根の広がりが大きく張り出す。



左：薬師寺三重塔

日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012



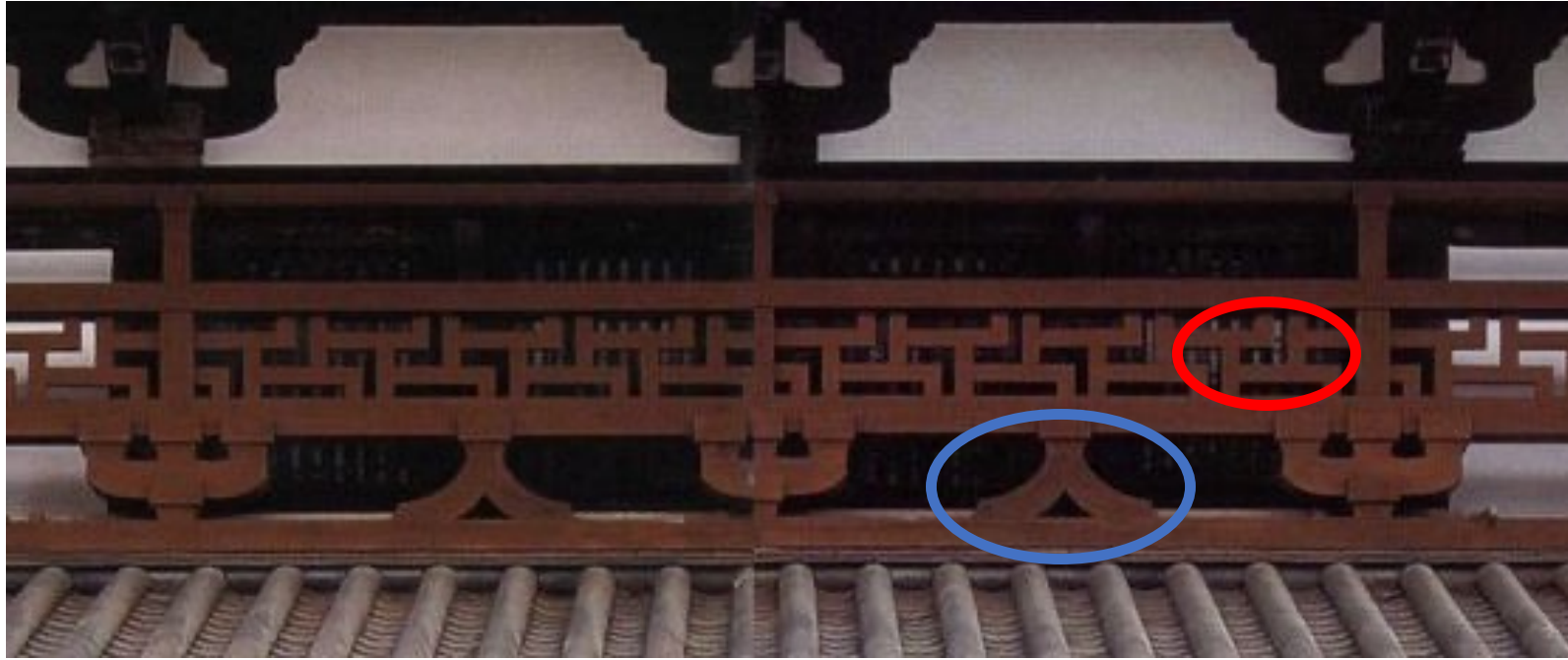
右：法隆寺五重塔

日本美術全集3 東大寺・正倉院と興福寺（小学館）監／浅井和春、2013

薬師寺の三重塔と比較すると屋根の張り出し具合の違いが分かる。

2. 法隆寺の建築には、細部のデザインでも独特の特徴があり、これが古様を示す可能性が想定できる。

- ・ 卍崩しの高欄 (まんじくずしのこうらん)
- ・ 人字形割束 (ひとじがたわりづか・にんじけいわりづか)
- ・ 雲形の組物 (くもがたのくみもの)

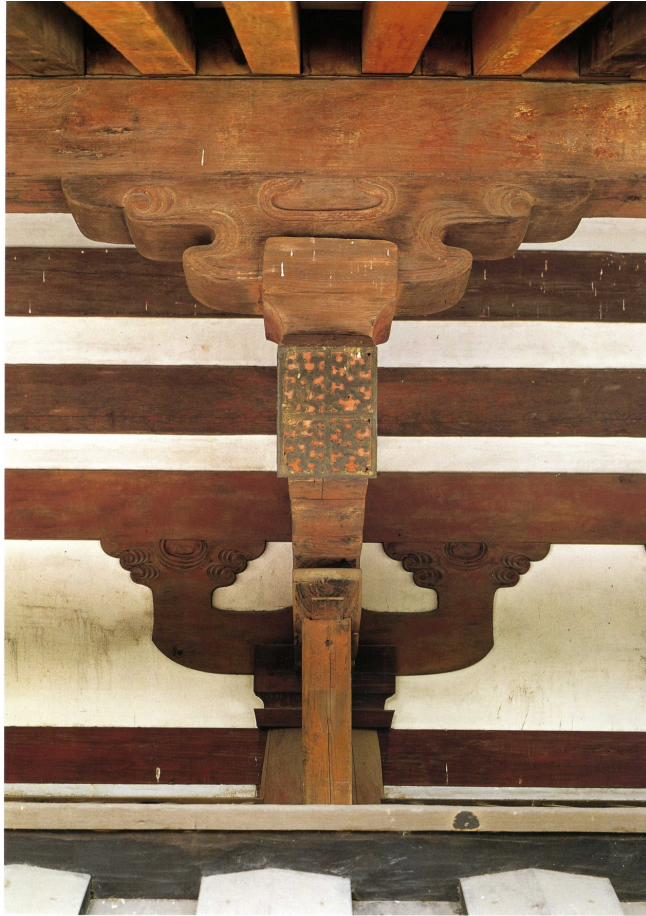


日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012

法隆寺建築の特徴あるデザイン1

卍崩しの高欄（○部分）

人字形割束（○部分）



六大寺大観 法隆寺1 建築 (岩波書店) 奈良六大寺大観刊行会、2001

法隆寺建築の特徴あるデザイン2 雲形の組物

3. 法隆寺には、推古三十一年
(623) 銘の「釈迦三尊像」が
伝来している。

※寺が完全に焼失したなら残らないはず。



日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院 (小学館) 長岡龍作、2012

4. 建築の際の基準尺の違いに注目する論説もある。

法隆寺の堂塔は高麗尺（こまじゃく）を基準としていることが、調査で判明。

後の建築が、唐尺（とうしゃく）を基準としているのと異なる。

大化改新以前の古い制度を残している可能性が想定できる。



日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012

5. 非再建論に有利な文献的根拠として

法隆寺に関する最古の記録である、天平十九年（747）の『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』（ほうりゅうじがらんえんぎならびにるいきしざいちょう）では、火災の件に全く触れていない、という事実がある。

以上の根拠から、文献史料ではなく、「モノ」史料から歴史を考察する、建築史・美術史の側からは、法隆寺は火災に遭っておらず、創建当初のままであるという説が主張された。

②法隆寺の再建・非再建論争

4) 折衷案の登場
= 二寺併存説

1. 遺跡として残っていた
「若草伽藍跡」に着目。
(わかくさがらんあと)

南大門東方に、塔の心礎が
残存。

図版削除

【二寺併存説の要点】

- 聖徳太子は、薬師如来を本尊とする若草伽藍と釈迦三尊を祀る法隆寺の二つを建立した。
- 天智九年（670）に焼失したのは若草伽藍で、法隆寺の方は聖徳太子創建時のまま残った。
- 法隆寺の土地からは焼けた土が出てこないなので、少なくとも火災があったのは、現法隆寺とは別の場所である。

【二寺併存説の要点】

- ・ 金堂の中心に釈迦三尊が置かれ、薬師如来が東側に客仏のように扱われているのは、薬師如来が罹災後、移されたためである。



中央：釈迦三尊像
右（東）：薬師如来像
左（西）：阿弥陀如来像

②法隆寺の再建・非再建論争

5) 二寺併存説の不成立

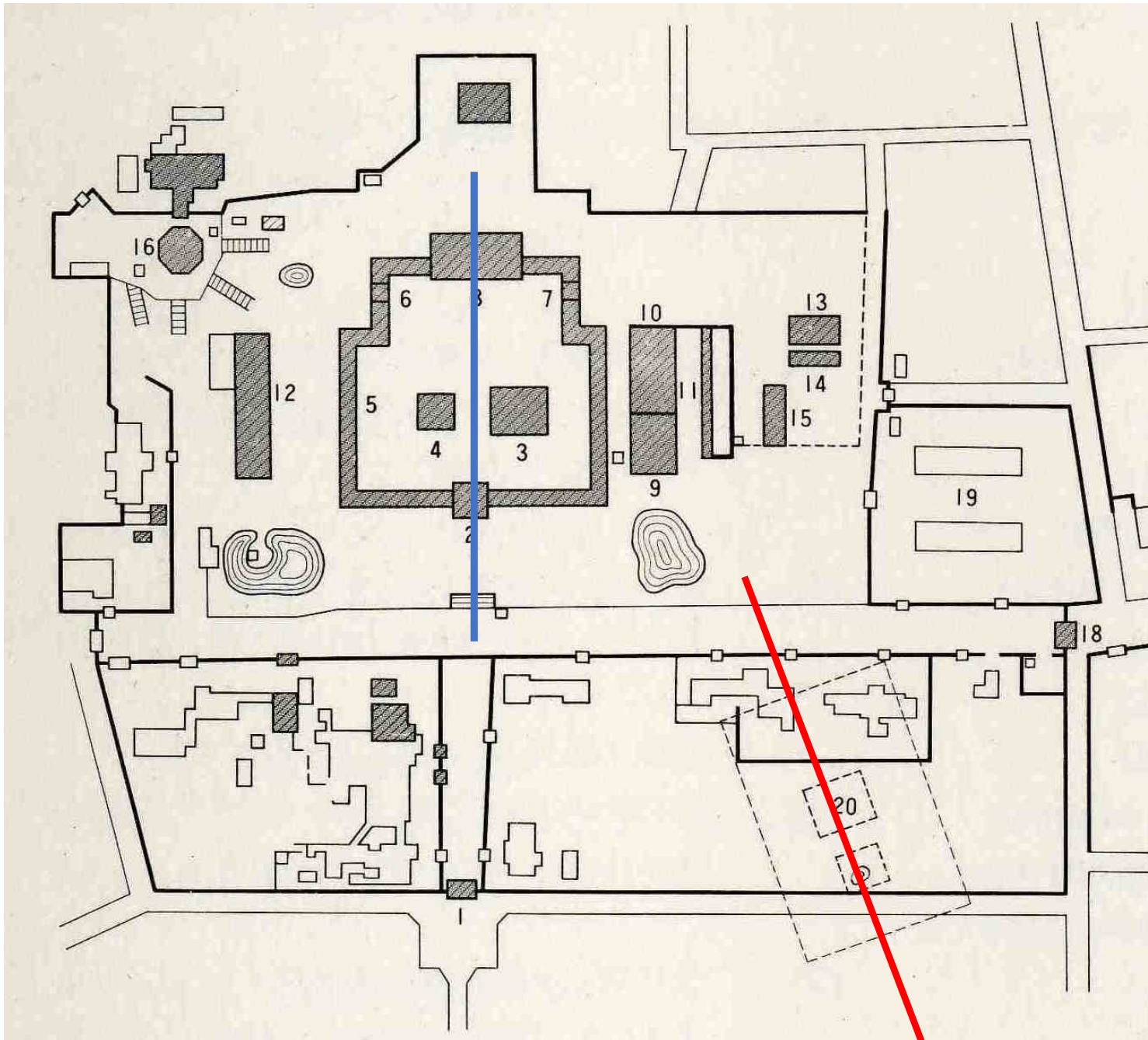
昭和十四年（1939）に行われた「若草伽藍跡」の発掘調査により、「二寺併存説」の矛盾が露呈する。

【二寺併存説の問題点】

1. 伽藍の**中心軸の傾き**が異なる。

若草伽藍の中心軸の傾き（**西へ20度**）と法隆寺の中心軸の傾き（**西へ4度**）が全く異なり、近接する二つの伽藍がこのように軸線を違えることは、都市計画としてあり得ない。

※次頁の図を参照。



赤線：若草伽藍の中心軸
青線：法隆寺の中心軸

【二寺併存説の問題点】

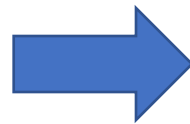
2. 瓦の年代の違い

若草伽藍出土の瓦は、法隆寺の瓦より古く、両寺の創立には時間差がある。

そのため、同時併存はあり得ない。



若草伽藍



法隆寺（西院伽藍金堂の創建瓦）

日本美術館（小学館）監／青柳正規、1997

右の法隆寺の瓦の方が、左の若草伽藍の瓦よりも、
文様が複雑・華麗に発展しているのが分かる。

【二寺併存説の問題点】

3. 以上のことから、創建当時の法隆寺は「若草伽藍」であり、その焼失後、現在の法隆寺が再建されたと考えられる。

音声26 

②法隆寺の再建・非再建論争

6) 再建の時期は？

- | | |
|-----------|-------------------------------|
| 持統七年（693） | 仁王会が法隆寺で行われ、持統天皇が天蓋を施入（『資材帳』） |
| 持統八年（694） | 持統天皇が、法隆寺に金光明最勝王經を施入。 |

以上の点から、火災後、20年程して再建が成ったと推定されている。

以上で、第1回の講義は、終了です。